

# 近現代における「推定」の モダリティ副詞の変遷 —ドウモとドウヤラを中心に—

小 池 康

## 1. はじめに

副詞ドウモは、実質的なモダリティを持った副詞の用法から応答詞・問投詞的な用法まで認められる副詞である。モダリティ副詞としてのドウモには、一方で「推定」のモダリティという点でドウヤラと、また一方で「漠然的認定」のモダリティという点でナンカ（ナニカを含む、以下同）・ナンダカ・ナントナクと類義関係が認められる。本稿はこのうち「推定」のモダリティを有するドウモとドウヤラに焦点を当て、明治時代以降、特に共起する形式との関係においてどのような変遷が見られるのか、その傾向を明らかにすることを目的とする。

ドウモとドウヤラを比較対照した先行研究は多く見受けられるが、史的な観点よりその意味や用法を考察したものは管見の限り見られなかった。「推定」のモダリティ副詞としてまとめ得るドウモとドウヤラの近現代での変化を調査・考察することにより、これらの副詞に関して先行研究では指摘されてこなかった新たな知見を提示したい。

## 2. 定 義

### 2.1 モダリティ

本稿で対象とするドウモとドウヤラに関する位置づけをする前に、本稿における「モダリティ」および「モダリティ副詞」の定義をしておく。

まず「モダリティ」は、小池（2004）に準拠し、以下のように定義する。

モダリティ：話し手・書き手の立場から定められる、命題（言表事態・叙述内容などともいう）に対する主観的な判断・態度を表わすカテゴリー（文法範疇）

この定義は、仁田（1991）の「真正モダリティ」および「疑似モダリティ」、また益岡（1991）の「一次的モダリティ」および「二次的モダリティ」の、それぞれの二つのモ

ダリティを一つに含んだ概念であり、それだけモダリティを広い概念として捉えている。そして、この「モダリティ」の機能を持つ副詞を「モダリティ副詞」と、また主に文末において「モダリティ」を具現化したものを「モダリティ形式」と呼ぶ。ここで言う「モダリティ形式」には、たとえばダロウ・ヨウダ・ラシイなどのようなモダリティを表わすことを目的とした形式の他、用言の活用形や名詞十ダ・デスも含むものとする。

## 2.2 ドウモとドウヤラ

モダリティ副詞としてのドウモ<sup>1</sup>とドウヤラの意味・用法を、小池（2006）を参考に定義する。小池（2006）は、現代日本語におけるモダリティ副詞としてのドウモについて、ドウヤラ／ナンカ・ナンダカ・ナントナクと比較対照することで、その意味・用法を明らかにしようとしたものである。

小池（2006）では、中道（1991）のドウモに関する論考および石神（1987）、飛田・浅田（1994）、森本（1994）、張（2003）などのドウモとドウヤラとの対照研究を批判的に検討し、ドウモに「推定」および「漠然的認定」という二つのモダリティを認めている。「推定」とは、山口（1991）に準じて設定されたもので、以下のように定義される。

**推定：**何らかの道理・証拠・状況などに依存しながら、事柄のありようを認定する作用を表わす<sup>2</sup>。

これは、何らかの証拠や根拠をもってある事柄を推し量ることであり、「話者の想像力によって事柄のありようを可能的に仮定する作用」を表わす「（狭義の）推量」（山口1991）とは区別される<sup>3</sup>。

(1a) （空の雲行きが悪い状況を見て）ドウモ明日は雨が降りそうだ。

小池（2006）より例を引くと、(1a)は「空の雲行きが悪い」という状況を判断基準にして「明日は雨が降りそうだ」と認定していることになる。しかし、雲行きが悪いからといって必ず雨になるとは限らない。その意味で、話し手（書き手も含む、以下同）は主観的・恣意的に〈雲行きが悪い⇒雨が降る〉という因果関係を想定して「雨が降る」と認定したと言える。

これは、たとえ証拠や根拠になりそうではないモノやコトであっても、話し手がそれを自分にとっては客観的な証拠や根拠として認定すれば表出可能だということを示している。逆に、話し手以外の人間（たとえば聞き手など）がどんなに証拠や根拠にふさわしいモノやコトだと判断しても、話し手自身がそれを証拠や根拠と認定しなければ、証拠や根拠にはならないということも表わしている。

ドウモには、このように何らかの主観的・恣意的な証拠・根拠をもって判断を下すという用法がある。ただし、この場合の判断は100%の確信をもって下しているのではな

いことに留意する必要がある。

そして、この「推定」の意味・用法でのドウモと類義関係にあると見なされるのがドウヤラである。実際、(1a)を(1b)のように替えても許容される文となろう。

(1b) (空の雲行きが悪い状況を見て) ドウヤラ明日は雨が降りそうだ。

ただし、ドウモとドウヤラはまったくの同義語というわけではない。

(2a) いろいろな資料から考えると、ドウモこういう結論になる(ようだ)。

(2b) いろいろな資料から考えると、ドウヤラこういう結論になる(ようだ)。

ドウヤラはドウモに比べると、高い蓋然性をもって命題が実現する、もしくは確かであるという見込み(傾き)<sup>4</sup>を含んでいると言える。換言すれば、ドウヤラは命題の実現・確からしさを積極的に主張している含みを持つということである<sup>5</sup>。

上例の(2a)も(2b)も共に「いろいろな資料から考える」を根拠にし、それより下した判断を表わしているが、ドウヤラを用いた方がより積極的に「こういう結論になるコト」という命題の確からしさ(命題が実現する蓋然性の高さ)を表わしている。それに比べると、ドウモを用いた場合はそのような積極的な主張といったものは感じられない。この違いは、先の(1a)と(1b)にも認められるであろう。

これはドウヤラが根拠と命題成立との関係を強く結びつけているためと考えられる。このことはさらに、たとえ根拠が明示的に示されなくても、ドウヤラを用いることによって何らかの根拠が存在しているという読みをもたらす。

さて、このようなある証拠や根拠をもって認定する作用とは別に、何の証拠や根拠もないが、ある事柄をただ漠然と感じるままに認定する作用というものも想定できる。これを小池(2006)では「漠然的認定」と呼んでいる<sup>6</sup>。

**漠然的認定：**道理・証拠・状況などの根拠に(明確には)依存せず、またはその根拠を(明確には)認識できないまま、事柄のありようを漠然と感じるままに認定する作用を表わす。

これは(3a)のようなものである。

(3a) ドウモいやな予感がする／おかしい／変だ／すっきりしない。

(3b) \*ドウヤライやな予感がする／おかしい／変だ／すっきりしない。

(3c) ナンカ・ナンダカ・ナントナクいやな予感がする／おかしい／変だ／すっきりしない。

(3) は何らかの証拠や根拠を明確には認識せずに表出された場合を想定したものである。この場合、当然のことながら、何が証拠・根拠となっているのかは明確には認識できず、ただ思うがまま感じるがままに漠然とそう認定するといった用法になる。ここには、話し手が主観的・恣意的にでも客観性を認めた証拠や根拠は想定できない。この用法の場合、(3b) のようにドウヤラとは代替不可であり、むしろ (3c) のようにナンカ・ナンダカ・ナントナクと近い用法になる。

なお、(3) の例文はいずれも述語が話し手自身の心理状態（感情・感覚を含む）を表わすものとなっているが、先の (1a) のような外界に関する命題内容を持つ文にナンカ・ナンダカ・ナントナクを代替しても、文自体は成立する (1c)。

(1a) (空の雲行きが悪い状況を見て) ドウモ明日は雨が降りそうだ。

(1c) (空の雲行きが悪い状況を見て) ナンカ・ナンダカ・ナントナク明日は雨が降りそうだ。

ただし、(1a) は〈雲行きが悪いコト〉を〈雨が降るコト〉の根拠として、いわば論理的な判断過程を経て表出していると言えるのに対し、(1c) には〈雲行きが悪いコト〉といった、いわば根拠と見なしうるコトが存在しているにも関わらず、それを判断基準とはせず、むしろ直感的に感じたままを表出している感が強い。

これらに対し、ドウヤラは先の (3b) や以下の (4b) のように、話し手が話し手自身の心理状態や感情を表わす内容とは共起しづらい。

(4a) \* (私は) ドウモうれしい／楽しい／愉快だ／さっぱりした。

(4b) \* (私は) ドウヤラうれしい／楽しい／愉快だ／さっぱりした。

(4c) (私は) ナンカ・ナンダカ・ナントナクうれしい／楽しい／愉快だ／さっぱりした。

なおドウモは、先の (3a) のような話し手のマイナス評価の心理状態を表わすものとは共起するが、(4a) のような話し手自身のプラス評価の心理状態とは共起しづらい。さらに、心理状態に限らず、以下の (5a) のようにマイナス評価を伴う物理的な事象を表わす場合には許容されるが、(6a) のようなプラス評価を述べる場合には出現しない。これらのことより、ドウモが使用できるのは話し手がマイナス評価を伴う場合に限り得られると考えられる。

(5a) ドウモ肩の痛みが取れない。

(5b) ナンカ・ナンダカ・ナントナク肩の痛みが取れない。

(6a) \* ドウモ肩の痛みが取れた。

(6b) ナンカ・ナンダカ・ナントナク肩の痛みが取れた。<sup>7</sup>

さて以上より、ドウモは話し手自らが客観的だと認める証拠や根拠がある場合には「推定」のモダリティ副詞となり、そのような証拠や根拠がない場合（加えてマイナスの評価を伴う場合）には「漠然的認定」の副詞になると言える。それに対して、ドウヤラは前者の「推定」の場合にしか使用されず、またナンカ・ナンダカ・ナントナクは「漠然的認定」の場合にしか使用されないと言える。

このように見てくると、ドウモとドウヤラは「推定のモダリティ副詞」という範疇でひとまず括ることができる。そして、これらの副詞を対象にして考察を加えようというのが本稿の目的である。

ここで改めて、本稿で対象とするドウモとドウヤラについて、以下のようにまとめておく。

### 「推定」のドウモ・ドウヤラ

#### 共通の意味・用法

1. 話し手が主観的にでも客観的な根拠（＝そう判断するに足る根拠）があると見なして、命題を認定する作用を表わす。
2. 「推定」のモダリティにおいては、ドウモもドウヤラも話し手自身の心理状態や感情を表わす内容とは共起しない。

#### 違い

ドウヤラはドウモに比べ、命題が実現する／確かである可能性が高いと認識しているニュアンスが強い。

以下、「推定」のモダリティ副詞としてのドウモとドウヤラについて、近現代における用法の変遷を用例調査を基に分析・考察する。

## 3. 資 料

資料は小池（2004）に修正を加えたものを使用した。この修正は、データ量をより均等にするために施した。資料は、明治期以降の大衆小説を中心に、60名の作家の72作品を対象としている。資料の一覧は本稿末に掲げた。また、分析の便宜上、下記の時期に区分して分析を進めた。これらの区分および作品の選定基準等については、小池（2004）を参照のこと。

明治期：明治 21（1888）年から明治 45・大正元（1912）年の 24 年間、18 作品  
戦前期：大正 2（1913）年から昭和 20（1945）年の 32 年間、14 作品  
戦後期：昭和 21（1946）年から昭和 48（1973）年の 27 年間、18 作品  
現代期：昭和 49（1974）年から平成 12（2000）年の 26 年間、22 作品

## 4. 分 析

分析の手順は、まずドウモが明治期以降に「推定」および「漠然的認定」のどちらの用法で使われる傾向があったのかを見、次いで本稿で対象とする「推定」の用法に限定して、共起するモダリティ形式（以下、「共起形式」と呼ぶ）の傾向を見る。

次に、同様にドウヤラの傾向について見て、最後にドウモとドウヤラが相互にどのような変遷を辿り、今後どのような変遷をしていくのかを考察する。

### 4.1 ドウモの傾向

#### 4.1.1 用法別の傾向

表1 ドウモの用例数

	明治期	戦前期	戦後期	現代期	計
推 定	43	34	40	23	140
漠然的認定	302	162	171	67	702
計	345	196	211	90	842

表1は本調査によって得られたドウモの用例数を、用法別および時期別に示したものである。これには応答詞の用法などの非モダリティ用法は含まれていない。

表1を見ると、「推定」と「漠然的認定」（この両者の用例の判別については後述）の間に大きな用例数の差が見られる。このことより、ドウモは何らかの根拠を伴った判断を表わす場合よりは、漠然と感じたままを表出する場合に用いられるのが主流であると言える。ただし、現代期に至って総用例数が激減していることも留意しておく必要がある。特に、「漠然的認定」の用例数が大きく減少している。

用例調査において、用例が「推定」の用法なのか「漠然的認定」の用法なのかの判別は、以下の二つの点が認められた場合に「推定」と認定することとした。すなわち、①判断の根拠が明示的に（もしくは文脈によって暗示的に）読み取れるもの、②話し手が話し手自身に関する心理状態を表出したものではないもの、の二点である。中には一義的に判別しづらいものもあったが、それは筆者の内省により文脈に即して判断した。以下、いくつかの例をもって違いを説明する。

- (7) <女将が若い芸者をそそのかすのを見て>『是りや如何も大事件になつた』と平野も大に乗り地になつた<sup>8</sup>（良人の自白99下）

この例は、「女将」が「若い芸者」に妻のいる男性（主人公）をくどくように勧めているところを、客の「平野」が傍で見ているといった状況である。この例では、①く女

将が若い芸者をそそのかす行為およびそれに起因するこれからの状況を根拠として「大事件になった」と判断し、②話し手すなわち「平野」が自分自身に関することについて表出したものではないことから「推定」の用例と判別した。

- (8) 「すると、やっぱり放火かね」「それがどうもはっきりしないらしいですな。隣が新玉川という芸者の置屋ですが、そこの軒から火が出て松東ホテルへ移ったという人もあるし、物置きから火が出て新玉川の軒にうつったという人もあるんですよ。(四十八歳の抵抗 151 下)

これは、火災保険会社に勤務する主人公の男性が、旅館でマッサージを受けながらマッサージ師と会話をしている場面である。①マッサージ師は他人から聞いた話をもとに「火事の原因が放火かどうかははっきりしない(らしい)」と判断しており、それは②マッサージ師自身とは関係がない。よってこの用例も「推定」と判定した。

これらに対し、次の(9)と(10)は「漠然的認定」と判定したものである。

- (9) 池さんのアイス踊りは本式で、理くつにはあってるんだが、どうも池さんの踊りには元気がねえな。(森と湖のまつり 48 下)

(9) は、話し手自身の心理状態や感情ではなく、「池さん」に関しての言及なので②は該当するが、①「池さんの踊りには元気がない」と判断した根拠は明示的にも暗示的にも示されていないため「漠然的認定」とした。

- (10) 「どうも、よく分からないな。悪いけど本当に君を忘れてるんだ。もう少し時間をくれ」(赤い記憶 160)

(10) は、相手の言っていることに対して「よく分からない」と言っているのだが、これを②話し手自身の心理状態を表わしていると判断し「漠然的認定」と判定した。この「わからない」の他、「困る」「しょうがない」「落ち着かない」「(気分が)よくない」などのような話し手の心理状態を表わす表現と共起したドウモは「漠然的認定」と判定される傾向にあった。以下の例を参照のこと。

- (11) 『どうも困りましたね。〈朝子は〉急性の腎臓炎です。余程病気は進んでるますよ。(母 509: 医者から朝子の弟への電話)
- (12) 『清水君、僕はどうも頭痛がして仕様がないから……君に此後を頼んで置くよ。(宿命 153 下)
- (13) どうも変だな、あんなに手間がかかって飾りつけが大変で、わざわざまずくするような料理〈＝オードブル〉が流行るってことは。(江分利満氏の優雅な生

以上が、本稿における「推定」と「漠然的認定」の判別法である。

次に挙げる (14) から (18) の例は、筆者が「推定」と判断した用例の一部である。このうち「活用形」と記載されているものは、具体的なモダリティ形式が共起していない、いわば「用言の活用形」が共起していると思ないうものである。

ちなみに、上記の (7) は「明治期」の「活用形」に該当するものであり、(8) は「戦後期」の「モダリティ形式ラシイ」と共起した例である。なお、現代期においては「活用形」の用例は見られなかった。

(14) 明治期・モダリティ形式ヨウダ

「く風呂場で会った同宿の客は」どうも病人のやうだが、然うでないかな。」  
「ああ、旦那様はお医者様で御座りやすか」貫一は覚えず噴飯せんと為つつ、  
「成程、好い事を言ふな。俺は医者ぢやないけれど、どうも見た所が病人のやうだから、然うぢやないかと思つたのだ。(続々金色夜叉 28)

(15) 戦前期・活用形

「わたしは、初めからさうぢやないかと思つてゐたが、どうもあの様子では、よつぽど根づよくあなたに執着を持つてますね。(緑の路 85 中)

(16) 戦前期・モダリティ形式ヨウダ

けれども、僕にいはせると、決してケチを付ける訳ぢやないが、どうも冬子さんつていふ人は、無意識かどうか知らないが、芝居気が多過ぎるやうだね。(破船 395 下)

(17) 戦後期・活用形

「どうもわしは、このキャッキヤツという声を出すので、人から足元を見られる。(奇病連盟 151 下)

(18) 現代期・モダリティ形式ヨウダ

「く使用人である「ぼたん」は」たしかに金儲けはうまいみたいだけど、どうも色恋とは関係ねえやうだなあの人は。笑つたの見たことあるのかお前、総金園でお獅子だよ」(人間万事塞翁が丙馬 172)

なお、共起形式が同一だからといって、同じ用法とはならない点に留意する必要がある。以下に、上記のモダリティ形式が用いられているが、「漠然的認定」と認めた用例を挙げておく(同一作品より選出)。

(19) 明治期・モダリティ形式ヨウダ

「どうも<sup>さき</sup>曩から見たやうだ、見たやうだと思つて居たら、間君ぢやないか」  
(金色夜叉中篇 143)



(20) 戦前期・モダリティ形式ヨウダ

小野は、〈中略〉自分の恋愛問題などは、どうも生<sup>いけはつ</sup>恥かしいやうな気がして、是迄別に兄に打明けたこともなかつたが、〈以下略〉(破船 416 伸)

(21) 戦後期・モダリティ形式ラシイ

ただ僕はこういう余計な忠告やおせっかいな世話焼きが、どうも性分に合っているらしいですね。(四十八歳の抵抗 26 上)

(22) 現代期・モダリティ形式ヨウダ

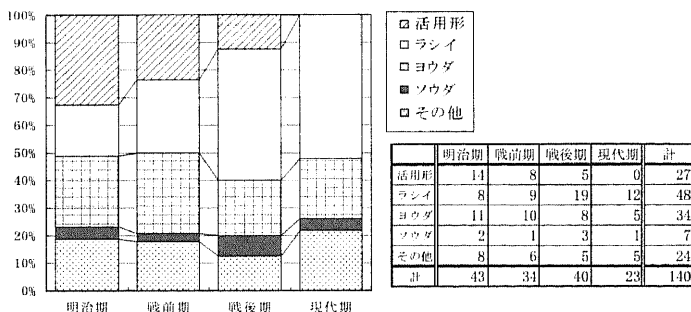
「どうも狐につままれたやうな話でね、警察へ行ったら、もう帰っていい。理由も何もねえんですよ、(人間万事塞翁が丙馬 163)

いずれも①話し手がそう判断した根拠が明示的にも暗示的にも示されておらず、またそれを想定することも困難で、②話し手自身に関する心理状態を表出しているといった点で、「漠然的認定」の特徴を満たしている。

#### 4.1.2 推定用法における共起形式別の傾向

本節では、本稿で対象とする「推定」の用法について、共起形式との関連において見ていく。

図表 1 ドウモ（推定）の共起形式別の用例数



図表 1 は推定のドウモについて、ドウモの共起形式別に表わしたものである。ある一定の用例数が見られたラシイ・ヨウダ・ソウダはそれぞれ実数を示したが、少数しか見られなかった形式は「その他の形式 (図表では「その他」)」としてまとめた (後述)。

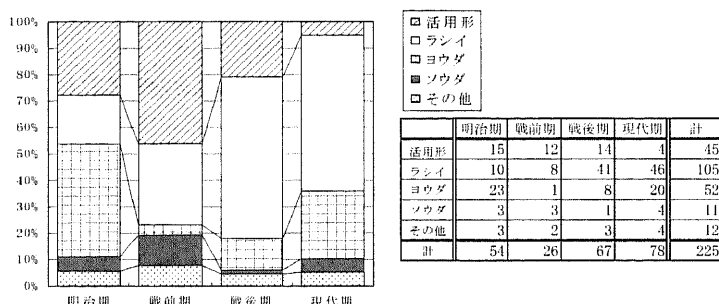
図表 1 より、特徴的な傾向として挙げられるのは、ラシイの増加である。明治期では 20% 弱の比率であったが、現代期では 50% 以上を占めるに至っている。そして、このラシイの増加傾向と対照的に活用形の用例が減少傾向にあることがわかる。特に現代期に至っては活用形を共起させている用例は皆無であった。また、ヨウダは多少の増減は見られるが、明治期以降どの時期においても 20 ～ 30% 程度の割合を占めている。

「その他」は総数で 24 例認められたが、特に多く見られた形式としては（ノ）デハナイカ（（ン）ジャナイカ・（ノ）デハナイダロウカなども含む）10 例：明治期 3 例、戦前期 4 例、戦後期 3 例、現代期 0 例であった<sup>9</sup>。

- (23) これは妾<sup>あたし</sup>の想像なので御座いますけれども、浜子さん、何うも房子さんの其後の御病気は、この事く＝房子が結婚直前で破談になったことくが原因になつてゐるのぢやないかしらと思はれますわ。（浜子 21 下）
- (24) 〈前略〉利兵衛はまた入っちまったらしいな。もちろん、刑務所だ。どうもこれは利兵衛の宿命じゃないかと俺は思っているが」（冬の旅 273）

## 4.2 ドウヤラの傾向

図表 2 ドウヤラの共起形式別の用例数



図表 2 は、ドウヤラの「推定」としての用例を共起形式別に見たものである。総用例数は 225 例で、ドウモの 842 例（表 1 参照）に比べると 4 分の 1 強であるが、「推定」の用法に限って比較するとドウヤラの方が多い（ドウモは 140 例（図表 1 参照））。また、ドウモは現代期の用例数がそれ以前の各時期の用例数に比べ最も少なくなっていたのに対し、ドウヤラでは現代期に至って用例数が最も多くなっている。さらに、時期別に「推定」のドウモとドウヤラの用例数を比較すると、戦後期では約 1.7 倍（ドウモ 40 例、ドウヤラ 67 例）、現代期では約 3.4 倍（ドウモ 23 例、ドウヤラ 78 例）の開きが見られる。これらのことから、現代期になるにつれ“「推定」のモダリティ副詞はドウモよりもドウヤラである”という認識が徐々に形成されつつあるという可能性が考えられる（ただし、あくまでも小説のレベルで）。

さて、ドウヤラの共起形式の特徴としては、①ラシイとの共起が増加傾向にある、②ヨウダは戦前期においては用例が減少した（実数では 1 例）が、その後増加傾向にある、③活用形は戦後期以降減少傾向にある、などが挙げられる<sup>10</sup>。

## ラシイの例

- (25) 此の様子で見ると、〈繁は〉何うやら口丈の悔悟でも無いらしいので、「心が最う蕩付いたのだ！」と〈欽哉は〉思ふと、欽哉は何よりも先づ忌々しいと云ふ氣が先に立つ。(青春 183 下：繁は欽哉の許嫁)
- (26) どうやらピート・河野は、ホテルも予約せずに、日本へやって来たらしい。  
(のるかそるか 76 上)

## ヨウダの例

- (27) 何うやら二三人の登音がする様だ、殿井は耳を欹てた。(魔風恋風 47)
- (28) 仕方なく十回ほど呼び続けたところで一旦、〈電話を〉切り、再びかけるが、やはり返事はない。どうやら凜子はもちろん、夫も帰っていないようである。  
(失楽園 165)

## 活用形の例

- (29) 〈前略〉、大きな犬はやがて心持良げに悠然とそこを立ち去つて行つて、子供たちが別にそれに呼びかけたりしない様は、どうやら子供たちとその犬とが親しい仲ではないことを明らかにした。(如何なる星の下に 212 上)

## 4.3 共起形式が副詞に与える影響

図表 1 および図表 2 において、特徴的な変遷を見せた共起形式としてラシイとヨウダが挙げられる。本節では、これらの共起形式とドウモ・ドウヤラとの関係について考察する。

### 4.3.1 ラシイ

ラシイは、その意味としては「ある客観的状态・事実をふまえて、ある事がらをかなりの確信をもって推量する場合に用いられ」る(外山 1969)、「客観的な推量判断」(吉田 1971)などとされる。また、「何等かの根拠から推定する意味を表わす」(岡本 1944)というものも見られる。また、現代語における研究でも「観察されたことを証拠として、未知の事実を推定する」(宮崎ほか 2002)という定義が見られる<sup>11</sup>。いずれにせよ、ある客観的な根拠(証拠)をもって推定する」といった意味であると言える。その意味では、本稿における「推定」のモダリティを有する形式と言える。

図表 1 でも図表 2 でも、ラシイは時代を経るごとに共起する割合が高くなっているが、この原因の一つとして、ラシイの用法の拡大が考えられる。田中(2002)には以下のような記述が見られる。

「～ラシイ」が用言に直接につく「行くラシイ」「来るラシイ」などの用法が生れたのも、この時期(＝明治三十年前後；筆者注)で、明治三〇年代に山の手ことばにおいて成立したものとみられる。〈中略〉

用言につく「～ラシイ」にしても、これらが、山の手ことばで、勢力を伸ばした

のは、むしろ大正期にはいつてからである。<sup>12</sup>

すなわち、ラシイはそれまでは主に体言についていたが、明治三十年代に用言と接続するようになり、大正期に入るとその用法も普及したと見られるのである。本稿での調査では、ドウモ・ドウヤラと共に起したラシイに限定された結果という制約はあるが、用言＋ラシイは、明治 34 (1901) 年の『無花果』でのドウモの例（下記 (30)）。(31) はドウヤラでの初例で、明治 36 (1903) 年の『魔風恋風』より）が最初で、それ以前は (32) の『金色夜叉』（明治 31 (1898) 年）や (33) の『小貓』（明治 24 (1891) 年）に見られるような体言＋ラシイの例のみであった<sup>13</sup>。

- (30) 風の声、雨の音の中から、何だか戸を叩くやうな音が微かに、ふと耳に入った。気の所為だらうと思つて見たが、何うも左様ではないらしい。自分の名を呼んでるやうだ——、耳の所為か知ら。（無花果 391 上）
- (31) 主婦の様子を見ると、何うやら今迄、姉の事に係つてお饒舌でもして居たらしいので、〈波は〉幼な心に何事が起つたらうと氣遣はしく、招かるまま姉の室に入れば、〈後略〉（魔風恋風 345）
- (32) 「富山唯継は」随分ちやらつぽこを言ふ人なんですから、なかなか信にはなりは致しませんが、妻君〈＝宮〉の病身の事や、那樣這麼で余り内の面白くないのは、どうも全く然らしいんで御座んす。」（続々金色夜叉 118）
- (33) お亀「ナ—、若様の方が御主人で彼旦那は御家来だとさ」彼旦那とは何やら自分の事らしく覚えて浅山謀樓婢共の前にツカツカと進み「オイ若様とは誰の事だ」（小貓 219）

このようなラシイの用法の拡大が、ドウモ・ドウヤラとの共起の増加に影響を与えた可能性は充分に考えられる。実際本稿における調査では、ドウモもドウヤラも活用形の用例数とラシイの用例数は特に戦後期・現代期と時代を経るごとに反比例の関係が進んでいる（図表 1、2 参照）。これは、ドウモについて考えると、ドウモを「推定」の意で用いようとする場合に「推定」のモダリティを持つラシイを共起させて、より明示的に「推定」の意味を表示しようとしていったため、用例数が増加したと考えられる。また、ドウヤラについては、ドウヤラもラシイも共に「推定」の用法を持つという共通点が影響して、用例数が増加したと考えられる。

#### 4.3.2 ヨウダ

ヨウダは図表 1 でも図表 2 でも明治期から用例が見られる。ここでのヨウダは比況や例示の意味ではなく、「不確かなまま、速まわしに断定する意味」（永野 1969）といった意味である。また、岡本（1944）にも「〈ヨウダは〉しかとした拠所なく、ただ何となく『さう感じられる』『さういふ気がする』の意に用ひることがある」という記述が見ら

れる。これらの記述を踏まえると、ヨウダは〈根拠なくそのように感じられる〉といった意味で認識されていたと言え、その点では本稿で設定した「漠然的認定」と通じていたと言える。

しかし、現代語の研究においては、宮崎ほか（2002）に「話し手が観察したこととして命題内容の成立を認識する」という定義（宮崎ほか（2002）では「基本性質」と呼んでいる）が示されている。この定義に依ると〈話し手が観察したこと〉という「根拠」が存在することが含意されることとなり、「推定」に近いと言える。

この宮崎ほか（2002）の定義は、一見上述の永野（1969）などの定義とは異なっているように見えるが、むしろ同じ事柄に対する解釈の違いに過ぎない。ヨウダは観察を以て根拠とし判断を下すという解釈と、根拠なくただ漠然とそう感じるという解釈のどちらの解釈も成立しうるものだと言える。

- (34) 「私は一目見ると、何うも貴方のやうに思ひましたから、懐かしいぢやアありませんか、他人の空似だつても懐かしいんですもの……（無花果 392 中）

(34) は、「一目見た時の判断を根拠として貴方だと思った」とも解釈できるし、「一目見た時の印象で、ただ漠然と貴方だと思った」という解釈も可能である。ただ、筆者の内省では、前者の解釈〈一目見た時の判断を命題（私が見たのは「貴方だ」）の成立根拠とする〉よりは、後者の解釈〈一目見た時の印象から漠然と命題（私が見たのは「貴方だ」）のように感じた〉と解釈する方が穏当だと判断されたので、本調査では(34)は「漠然的認定」と判定した。ただ、このような微妙な解釈の判定については、さらに議論を要するであろう。

さて、ヨウダを史的に見ると、「江戸語の『ようだ』は、前期上方語での『ような』に相当するもので、その意味も用法も、だいたいにおいて、現代語と同様である。」（松村 1977）とされることから、明治期以降にヨウダの意味・用法が大きく変化したとは考えにくい。

図表 1 を見ると、ヨウダがドウモと共に起している例は全期を通じて 20% から 30% の割合を占めている。これは、ドウモとラシイの増加傾向と比較すると、全時期を通じて安定していると言える。また、「漠然的認定」と判定したドウモにおいても、ヨウダは明治期 29 例（当該時期における「漠然的認定」の全用例数に占める割合は 9.6%）、戦前期 10 例（同 6.2%）、戦後期 13 例（同 7.6%）、現代期 8 例（同 11.9%）見られた（「漠然的認定」でのヨウダの具体例は (19) (20) (22) を参照のこと）。

これは、上述したようにヨウダに「推定」と「漠然的認定」の双方の解釈が可能となる場合があるので、それが反映されたものと考えられる。ヨウダに複数の解釈ができることが、ドウモの「推定」「漠然的認定」の双方の用法と共に起する要因になったのではないだろうか<sup>14</sup>。

また、ヨウダの用例数に変化が見られなかった理由として、先のラシイは大正期に至っ

て用言への接続が普及したというように、用法のダイナミックな変化が見られたが、ヨウダには近現代においてそのような変化は見られなかったということも挙げられるであろう。

ドウヤラとの共起に関して見ると、ドウモの傾向とは異なっている。特に、明治期において40%強の割合を占めていたものが、次の戦前期では3.8%（実数では1例）となり、その後また徐々に増加傾向にある（現代期ではラシイに次ぐ割合（25.6%）を占めている）。

戦前期においてヨウダの共起例が激減した理由については、まだ明確な解答を持ち合わせていない。戦前期にヨウダが激減したことは、ドウモの傾向とはまったく異なっている。この時期のドウヤラは他の時期のドウヤラの用例数と比較しても極端に少なく、またこの時期のドウヤラのみ同時期のドウモよりも用例数が少ないなど、特徴的な出現傾向となっている。

もしドウモとドウヤラが類義と認識されていたならば、その共起形式の傾向も似たものとなるであろう。これは、先に見たラシイと活用形との共起が良い例である。逆に、類義と認識されていなかったならば、ラシイのと共通性に疑問が生ずることになる。この違いを解明するためには、さらに分析を進める必要があるが、本稿では保留としておきたい。

## 5. おわりに

「推定」のモダリティ副詞ドウモとドウヤラを対象に、その意味・用法および明治期以降における両副詞の用法の変遷を考察した。

「推定」のモダリティ副詞としては、用例数ではドウモよりもドウヤラのほうが多かった。また、共起形式の変遷という視点で見ると、共に明治期には活用形やヨウダを中心に共起していたが、時期が下るにつれラシイとの共起が増え、逆に活用形との共起が減少していた。これは、ラシイの構文論的なふるまいが明治期以降変化したことに起因していると考えられる。

ドウモは判断のモダリティとして「推定」の他にも「漠然的認定」も認められた。今回の結果では、「推定」の用法よりも「漠然的認定」の方の用例が多数を占めていたことから、ドウモは「漠然的認定」との認識が相対的に強い副詞と言え、逆に「漠然的認定」の意味を持たないドウヤラは、特に現代期に至って「推定」のモダリティ副詞として認識される傾向が強くなっているものと考えられる。

しかし、これはあくまでも現段階での仮説であり、「漠然的認定」の意味・用法を持つナンカやナントナクといった副詞群への考察も終えた上で再考されるべきものであろう。今後は、その関係も分析し、ドウモを中心としたモダリティ副詞群に関して考究を進める必要がある。

## 資料一覧

以下に本論文で資料とした作品の一覧を示す。リストは、順にく作品名、初版出版年、作家名、生（没）年；テキスト、テキスト出版年、テキスト出版社；文字数）を表わす。

**明治期の作品（18）：約 3,434,751 字** ●「小貓」1891、村井弦斎（1863-1927）；『大悲劇名作全集第四巻 小貓』1935、中央公論社；322,168 ●「金色夜叉」1898、尾崎紅葉（1867-1903）、春陽堂；『精選名著復刻全集 金色夜叉』（前編 1898・中編 1899・後編 1900・続編 1902・続々編 1903）1979、日本近代文学館；271,203 ●「不如帰」1898、徳富蘆花（1868-1927）；『明治大正文学全集 第十三巻 徳富蘆花』1930、春陽堂；143,520 ●「己が罪（前篇）」1899、菊池幽芳（1870-1947）；『明治大正文学全集 第十八巻 菊池幽芳』1928、春陽堂；130,780 ●「無花果」1901、中村春雨（1877-1941）；『現代日本文学全集 第三十四篇 歴史・家庭小説集』1928、改造社；133,560 ●「錦木」1901、柳川春葉（1877-1918）；『明治文学全集 22 硯友社文学集』1969、筑摩書房；61,824 ●「秋裕」1902、柳川春葉；『明治文学全集 22 硯友社文学集』1969、筑摩書房；26,880 ●「浜子」1902、草村北星（1879-1950）；『明治家庭小説集』1969、筑摩書房；152,320 ●「魔風恋風」1903、小杉天外（1865-1952）；『明治大正文学全集 第十六巻 小杉天外』1930、春陽堂；311,480 ●「黒潮 第一篇」1903、徳富蘆花、黒潮社；『徳富蘆花集 第7巻』1999、日本図書センター；203,034 ●「乳姉妹」1903、菊池幽芳（1870-1947）；『明治家庭小説集』1969、筑摩書房；272,384 ●「良人の自白 上篇・中篇」1904、木下尚江（1869-1937）；『明治文学全集 45 木下尚江集』1977、筑摩書房；297,472 ●「女波」1904、田口掏汀（1875-1943）；『明治家庭小説集』1969、筑摩書房；222,208 ●「青春 春之巻・夏之巻」1905、小栗風葉（1875-1926）；『明治大正文学全集 第十七巻 小栗風葉』1928、春陽堂；238,680 ●「琵琶歌」1905、大倉桃郎（1879-1944）；『明治家庭小説集』1969、筑摩書房；94,080 ●「コブシ 前篇」1906、小杉天外；『明治大正文学全集 第十六巻 小杉天外』1930、春陽堂；124,280 ●「寄生木 上篇」1909、徳富蘆花；『徳富蘆花集 第9巻』1999、日本図書センター；158,998 ●「生さぬ姉 前篇・中篇」1912、柳川春葉；『明治大正文学全集 第19巻 柳川春葉 佐藤紅緑』1929、春陽堂；269,880

**戦前期の作品（14）：約 3,551,295 字** ●「渦巻」1913、渡辺霞亭（1864-1926）；『大悲劇名作全集第八巻 渦巻』1934、中央公論社；551,650 ●「五人姉妹」1915、柳川春葉；『現代日本文学全集 第五十五篇 小栗風葉集・柳川春葉集・佐藤紅緑集』1931、改造社；140,616 ●「宿命」1918、沖野岩三郎（1876-1956）；『近代日本キリスト教文学全集 5』1975、教文館；243,880 ●「地の果てまで」1920、吉屋信子（1896-1973）；『吉屋信子全集 2 地の果てまで・空の彼方へ』1975、朝日新聞社；255,840 ●「破船」1922、久米正雄；『現代日本文学全集 第三十二篇 近松秋江集・久米正雄集』1928、改造社；288,792 ●「緑の路」1925、小栗風葉；『現代日本文学全集 第五十五篇 小栗風葉集・柳川春葉集・佐藤紅緑集』1931、改造社；147,420 ●「第二の接吻」1925、菊池寛；『菊池寛全集 第七巻 長篇小説集三』1994、文芸春秋；162,656 ●「富士に題す」1930、佐藤紅緑（1874-1949）、大日本雄弁会講談社、初版本；445,500 ●『母』1929、鶴見祐輔（1885-1973）、大日本雄弁会講談社、215 版（1929）；363,000 ●「かかん虫は唄う」1930、吉川英治（浜帆一）（1892-1962）；『吉川英治全集 10』1983、講談社；131,600 ●「若い人 前篇」1933、石坂洋次郎（1900-86）；『日本現代文学全集 86 石坂洋次郎・石川達三集』1961、講談社；232,290 ●「真実一路」1936、山本有三（1887-1974）；『増補決定版 現代日本文学全集 59 山本有三集』1973、筑摩書房；248,472 ●「如何なる星の下に」1940、高見順（1907-65）；『高見順全集 第一巻』1974、勁草書房；148,500 ●「路傍の石」1941、山本有三；『増補決定版 現代日本文学全集 59 山本有三集』1973、筑摩書房；191,079

**戦後期の作品（18）：約 3,442,486 字** ●「土曜夫人」1946、織田作之助（1913-47）；『定本 織田作之助全集 第七巻』1971、文泉堂書店；142,272 ●「地底の歌」1948、平林たい子（1905-72）；『新選 現代日本文学全集 18 平林たい子集』1959、筑摩書房；117,327 ●『石中先生行状記』1949、石坂洋次郎、新潮社、初版本；231,880 ●「武蔵野夫人」1950、大岡昇平（1909-88）；『日本文学全集 64 大岡昇平集』

1962、新潮社；146,616 ●『風ふたたび』1951、永井龍男（1904-90）；『永井龍男全集第5巻』1981、講談社；167,328 ●『君の名は（第一部）』1952、菊田一夫（1908-72）；『君の名は 上』新装版初版、1991、宝文館出版；210,392 ●『三等重役』1952、源氏鶏太（1912-85）、毎日新聞社、第十版；163,056 ●『雑居家族』1955、壺井栄（1899-1967）；『壺井栄全集7』1998、文泉堂出版；171,840 ●『四十八歳の抵抗』1956、石川達三（1905-85）；『昭和国民文学全集 27 石川達三集』1979、筑摩書房；218,504 ●『おとうと』1957、幸田文（1904-90）、中央公論社、5版 1957.11.25（初版 1957.9.27）；164,475 ●『森と湖のまつり（一〜三）』1958、武田泰淳（1912-76）；『武田泰淳全集 第七巻』1978、筑摩書房；234,520 ●『江分利満氏の優雅な生活』1961、山口瞳（1926-1995）；『新潮現代文学 58 江分利満氏の優雅な生活・人殺し』1980、新潮社；129,272 ●『のるかそるか』1964、梶原素之（1930-75）、初版本、文芸春秋新社；308,760 ●『奇病連盟』1966、北杜夫（1927-）；『北杜夫全集7』1977、新潮社；200,278 ●『冬の旅 上巻』1969、立原正秋（1926-80）、初版本、新潮社；238,220 ●『青春の門 第二部 自立篇上』1971、五木寛之、講談社、初版本；208,170 ●『立ち盡す明日』1971、柴田翔（1935-）、新潮社、初版本；122,976 ●『恍惚の人』1972、有吉佐和子（1931-84）、新潮社、初版本；266,600

現代期の作品（22）：約 3,434,816 字 ●『雨やどり 新宿馬鹿物語』1975、半村良（1933-2002）、河出書房新社、初版本；119,040 ●『限りなく透明に近いブルー』1976、村上龍（1952-）、初版本；96,876 ●『エーゲ海に捧ぐ』1977、池田満寿夫（1934-97）、角川書店、初版本；108,300 ●『離婚』1978、色川武大（1929-89）、文芸春秋、初版本；90,371 ●『ナポレオン狂』1979、阿刀田高（1935-）、初版本、講談社；198,918 ●『思い出トランプ』1980、向田邦子（1929-81）；『向田邦子全集 第三巻』1987、文芸春秋；139,104 ●『人間万事塞翁が丙午』1981、青島幸男（1932-2006）、新潮社、初版本；200,466 ●『なんとなく、クリスタル』1981、田中康夫（1956-）、河出書房新社、23版 1981.2.26（初版 1981.1.20）；64,610 ●『恋文』1984、連城三紀彦（1948-）、新潮社、初版本；148,608 ●『最終便に間に合えば』1985、林真理子（1954-）、文芸春秋、初版本；144,942 ●『旅の幻燈』1986、五木寛之、講談社、初版本；224,010 ●『堀の中のプレイ・ボール』1987、安部譲二（1937-）、講談社、初版本；129,948 ●『熟れてゆく夏』1988、藤堂志津子（1949-）、文芸春秋、初版本；127,194 ●『高円寺純情商店街』1989、ねじめ正一（1948-）、新潮社、初版本；144,609 ●『白河夜船』1989、吉本ばなな（1964-）、福武書店、初版本；108,654 ●『緋い記憶』1991、高橋克彦（1947-）、文芸春秋、初版本；213,624 ●『受け月』1992、伊集院静（1950-）、文芸春秋、初版本；183,438 ●『アムリタ 上』1994、吉本ばなな、福武書店、初版本；176,640 ●『失楽園 上』1997、渡辺淳一、講談社、初版本；231,420 ●『鉄道員』1997、浅田次郎（1951-）、集英社、初版本；197,316 ●『プラナリア』2000、山本文緒（1962-）、文芸春秋、初版本；178,364 ●『ビタミン F』2000、重松清（1963-）、新潮社、初版本；208,206

## 注

- 1 ドウモには、モダリティ副詞として機能する用法とモダリティ副詞としては機能しない用法がある。後者には、「応答詞的・問投詞的に用いる用法」（例1）、「感謝や謝罪等の表現の前に置く用法」（例2）、「あいさつとしての用法」（例3）などが挙げられる（中道 1991）。
  - (1) 「あいっ最近変だとおもわないか」「うん、どうもね」
  - (2) すっかり遅くなって、どうもすいませんでした。
  - (3) 「もしもし、津田です」「あ、八木です。どうも」「どうも」
- 2 仁田（2000）の「徴候性判断」とも近い捉え方と言える。
- 3 山口（1991）は、「推量の助動詞」の下位類として「推定」「（狭義の）推量」を設定している。各範疇に該当する形式として、「推定」ではハズダ・ベキダ・ラシイ・ヨウダ・ソウダ・カモシレナイを、「（狭義の）推量」ではダロウを挙げている。
- 4 安達（1999）は、このような見込みのことを「傾き（bias）」と呼んで、否定疑問文の意味分析に用い



ている。本稿での考察でも応用可能な概念と判断したため、この用語を援用した。

- 5 ドウヤラの用法としては、「推定」の他にも「ほぼ間違いなく実現に至ったと感ずる判断」（森田 1989）や「最低の状態を確保している様子」（飛田・浅田 1994）といったものがある。
  - (1) どうやら終わりに近づいた。（森田 1989 の例）
  - (2) 一生懸命走って列車にどうやら間に合った。（飛田・浅田 1994 の例）
- 6 小池（2006）では「漠然性認定」という用語を設定したが、これだと漠然とした性質のものを認定するといった意味に解釈され、認定のしかたが漠然としているといった意味で解釈されない恐れがあるので、本稿より「漠然的認定」とする。また、本稿では定義自体にも修正を加えた。
- 7 「ドウヤラ肩の痛みが取れた。」は許容される文だが、この場合のドウヤラは「ほぼ間違いなく実現に至ったと感ずる判断」（森田 1989）を表わすもので、「漠然的認定」とは言えない。
- 8 本稿における用例および引用において、旧字体は新字体に改め、踊り字も仮名に改めた。また、用例中のくゝは筆者の注である。さらに、ドウモに該当する部分に下線を施したので、当該箇所にもルビは付していない。
- 9 「その他」に含まれる他の形式としては、二違イナイ、カモシレナイ（共に計 4 例ずつ）、ミタイダ（計 3 例）などがあった。
- 10 ドウヤラにおける「その他」の共起形式としては、デハナйка・ミタイダなどがあった。
- 11 現代語におけるヨウダとラシイを比較した研究としては、紙谷（1995）、三宅（1995）、仁田（2000）などもある。
- 12 このような、ラシイが明治期以降に多用され、用法も広がった旨の記述は松村（1977）にも見られる。
- 13 青年文化協会（1942）では、「推量の文形」として「どうも…らしい」が、「石田さんはどうも来ないらしいですね。」という例と共に挙げられている。同書は、外国人への日本語教育（練習）を目的に、当時の話しことばで「標準的」と認められる文型を集録・排列したものである。その意味で、当時（昭和 15 年前後）には「どうも…らしい」という文型が「標準的」であるという認識があったことがうかがえる。
- 14 これに対しラシイは「推定」と判断される用例がほとんどで、「漠然的認定」で共起した用例は 3 例しか認められなかった（その一例が（21））。

## 参考文献

- 安達太郎（1999）『日本語疑問文における判断の諸相』、くろしお出版
- 石神照雄（1987）『陳述副詞の修飾』、寺村秀夫ほか編『ケーススタディ日本文法』：96-101、おうふう
- 岡本禹一編輯（1944）『日本語表現文典』、国際文化振興会（『日本語教育史料叢書〈復刻版〉第三期 日本語教授法基本文獻－Ⅱ 日本語表現文典』1996、冬至社）
- 紙谷栄治（1995）『助動詞「ようだ」「らしい」について』『宮地裕・敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』：549-573、明治書院
- 小池 康（2004）『近現代日本語モダリティ副詞の史的変遷に関する研究』、筑波大学博士（言語学）論文
- （2006）『モダリティ副詞としてのドウモードウヤラ・ナンカ（ナニカ）・ナンダカ・ナントナクとの関連において―』『筑波大学留学生センター 日本語教育論集』21：1-18
- 青年文化協会（1942）『日本語基本文型』、国語文化研究所
- 田中章夫（2002）『近代日本語の語彙と語法』、東京堂出版
- 張 根壽（2003）『証拠性判断を表す副詞について―「どうやら」と「どうも」を例に―』『日本語と日本文学』37：43-56
- 外山映次（1969）『らしい―推量〈現代語〉』、松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』：223-228、學燈社

永野 賢 (1969)「ようだー比況く現代語」、松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』:312-318、學燈社  
中道真木男 (1991)「副詞の用法分類－基準と実例－」『日本語教育指導参考書 19 副詞の意味と用法』:  
109-180、国立国語研究所  
仁田義雄 (1991)『日本語のモダリティと人称』、ひつじ書房  
—— (2000)「認識のモダリティとその周辺」『日本語の文法 3 モダリティ』:79-159、岩波書店  
飛田良文・浅田秀子 (1994)『現代副詞用法辞典』、東京堂出版  
益岡隆志 (1991)『モダリティの文法』、くろしお出版  
松村 明 (1977)『近代の国語 江戸から現代へ』、桜楓社  
三宅知宏 (1995)「ラシイとヨウダー概言の助動詞①」、宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法  
(上) 単文編』:183-189  
宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002)『新日本語文法選書 4 モダリティ』、くろしお出版  
森田良行 (1989)『基礎日本語辞典』、角川書店  
森本順子 (1994)『話し手の主観を表す副詞について』、くろしお出版  
山口堯二 (1991)「推量体系の史的変容」『国語学』165:26-37  
吉田金彦 (1971)『現代語助動詞の史的研究』、明治書院

(こいけ やすし 筑波大学留学生センター 非常勤講師)